

関八州の旅がらす

新潮社

時代小説の楽しみ 三



時代小説の楽しみ 三

関八州の旅がらす

新潮社

工業学院図書館

蔵書



関八州かんはつしゅうの旅たびがらす
時代小説じだいしょうせつの楽しみたのしみ③



著者 子母沢寛しもざわかん他

発行 一九九〇年五月五日

四刷 一九九〇年一月一日

発行者 佐藤亮一

発行所 郵便番号一六二
東京都新宿区矢来町七十一番地

株式会社 新潮社

電話 業務〇三(266)五一一 編集〇三(266)五四一一

振替 東京四一八〇八

印刷所 二光印刷株式会社 製本所 加藤製本株式会社

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

価格はカバーに表示してあります。

© Kazuo Nawata & SHINCHOSHA 1990, Printed in Japan

ISBN4-10-602803-4 C0393

目

次

紋三郎の秀

子母沢寛 7

清水の次郎長

子母沢寛 21

段七しぐれ

長谷川伸 39

国定忠治の子

長谷川伸 69

三味線やくざ

川口松太郎 105

紅だすき無頼

山手樹一郎 145

桑名の宿

尾崎士郎 177

ひとり狼

村上元三 205

修羅長脇差

柴田錬三郎
237

繁蔵御用

山口 瞳
257

森の石松が殺された夜

結城昌治
289

見かえり峠の落日

笹沢左保
353

背中の新太郎

伊藤桂一
391

帰郷

藤沢周平
413

忠治はぐれ旅

長部日出雄
459

編者解説

縄田一男
487

装画・赤坂三好

関八州の旅がらす

時代小説の楽しみ③

紋三郎の秀

子母沢寛

子母沢寛（しもざわ・かん）

明治二十五（一八九二）年、北海道生れ。明治大学法学部卒業。当初の弁護士志望から、新聞社勤務を経て、昭和三年『新選組始末記』を処女出版。五年『笹川繁蔵』で文壇デビュー。以後、『国定忠治』『駿河遊俠伝』などで股旅小説の草分けとなる。戦後は『勝海舟』『父子鷹』などの幕末小説を多く発表し、三十七年、菊池寛賞受賞。四十三年没。三十七年に、中央公論社から全集が刊行されている。

一

雪のちらちら降る日であった。

下総の行徳から木下へつづく鎌谷ヶ原で、御家人風の侍二人を相手に斬合っている若い渡世人があった。斬合うというよりは、侍の振りかぶっている刀の下で、静かに脇差を抜いたと思うと、忽ち稲妻のように二人を突き伏せて、そのまま裾まわりについた雪を払うと、傍においた三度笠を小脇にかかえて、悠々と立ち去りかけた。

木下のばくち打ち魚屋の徳蔵は、ちょうど江戸からの戻りで、行徳で船から上がって、ここへめぐり合せた。余り遣口が見事なので、

「如何でござんす、あッしのところへ草鞋をぬいで、ゆっくりなすっちゃア下さいませんか」
と思わず声をかけたが、その男は、小腰をかがめて、

「お言葉有難うさんでござんす。手前ちといそがしい旅でござんす、わざッと御辞退申しますでござんす」

と、そのまま名乗りもせずにしたすたと脇道へ入ってしまった。

年のころ二十二、三、切れの長い目で、髪びんの毛が二、三本頬から口元へ——尻を端折った袷あわせに基盤こばん

縞の下馬がついて、きりりッとして惚れ惚れとするいい男であつた。一度振返つて、にっこり笑つたら、両頬に小指が入るくらいなえくぼがあつた。

徳蔵は家へ戻つてから、幾度もこの男の噂をした——てえした腕よ、侍二人が友達の敵だとか何んとかいつて斬りかかったんだが、最初は脇差に手もかけねえ。何かこうその斬つた一件について理解をしゃべっているようだったが、どうしても侍が承知しねえんだ。生憎の雪でよ、よく聞き取れアしなかつたが、話の様子で江戸の侍を三人斬つてずらかつて来たのを、仲間が追つかけて来たらしいんだな。やくざの中にもあれ程腕の達者な奴がいるかと俺アただ感心して眺めていたよ——。

そんなことから一年経つた秋である。

大利根の流れが銀のように光つて、やがて冷えびえとした冬がこの中から湧き上るようであつた。川を渡つて野から野へ、時々野分した。

黒い手甲脚絆に草鞋、もう日が暮れるという時分に、木枯を背に、魚屋徳蔵の敷居をまたいだ旅人があつた。

「常州笠間、紋三郎の秀五郎という親分無しの渡り鳥でござんす」といつた。

それが、あの鎌谷ヶ原の小粋な渡世人だったので、徳蔵もびっくりしたが、秀五郎も少し驚いたようであつた。

二

「御縁が深けえとでも申しやしよう、あの時お名前も承らず、また手前も申上げず、さらりとお別れ申しやしたが、今ごろこうして御厄介もンとは思ひもよらねえこつてすよ」

秀五郎は、こんなことをいつて、またあの深いえくぼを見せた。

「本当にな、だがおまはんの噂は、三日にあげず出ていたんだ、よく来てくんすつた。あッしのと

ころじゃア、実アいま猫の手一つでも借りてえ時なんだ。おまはんのような腕つぶしの立つ客人が草鞋をぬいでくれたことア、弥太、いよいよ運のつきだ」

徳蔵は、忘れなかった旅人との奇遇も奇遇だが、それよりも今自分達一家の目の前にぶら下って悩み抜いている生命がけの縄張争いの前に、この男がひっこりやって来てくれたことは、百万人の味方が加わったような心地がした。

あねさんが挨拶に出る。子分達がぞろぞろ近づきに出る。

酒も肴も山のように積んで、

「お客人、お客人」

と下へもおかぬもてなしであった。

秀五郎はふと気がついて、

「さっきの弥太っての？」

「何アにね、おまはんなんざア御存知はねえだろうが、取手のばくち打ちで蜜柑屋の弥太五郎という奴。あッしの縄張を狙って、実アいつ何ん時、どこからドスが降ってくるかわからねえんだ、まごまごしているよりアこっちから斬り込むのが早道だが、何しろこっちは手が足りねえ、向うには用心棒の侍が、いつも三人や四人ごろっちらしているんでア」

「喧嘩ですかえ」

「うッふッふッ。あの鎌谷ヶ原の様子じゃア、おまはん若けえが喧嘩は好きそうだ。殊には一旦ぬいだ作法の草鞋、おまはん助はいやだと薄情をいう人とも思われねえ」

「……………」

秀五郎はひどくいやな顔をした。そして、それっきり、口もきかなくなつて、煙草を取出して、すばりすばりとすつていた。

夜が更けてみんな寝た。

秀五郎は、いつまでもいつまでも煙草をすつては考えていた。

「俺アいやだなア、どうしてこう物のわからねえ喧嘩好きばかりがいやがるんだ。俺ア喧嘩はきれえだよ」

ひとりごとをいった。

三

なるようになれというような心持で、秀五郎は、賭場べりに、ぶらぶらとくらししていた。

紅葉が次第に濃くなつて、秀五郎の名は、魚屋一家のものが、ふたこと目には口にせねばならぬようになつた——第一男がああ通りのいいやな、それにばくちがべらぼうにうめえ、丁と切りア、半と切りア半、あの人々の張り方アまるで人間業じゃアねえや、それが、いんちきでも、いかさまでもねえからもの恐ろしい話よ。常州笠間紋三郎稲荷の神主さんの倅だというのが、どうもあの人にアお稲荷さんがついてゐるぜ。あれで、江戸で、本所の悪侍と喧嘩をして、それを三人叩ッ斬つた。その三人の敵討に來た二人を叩ッ斬つた。しかもよ、その五人が五人ともお突き一本でおさめてしまふんざア、わしア氣に入つた！ 子分達が、こんな話をしてゐると、徳藏はいつも叱りつけていた。

「大きな声を出すな、その侍つてのがみんな御直參でな、秀さんのからだア草の根を掘つて探し歩いてるんだ。もしもよ、弥太の野郎との喧嘩の前に引くくられでもして見ねえな、味方のためにア軍神に見放されたようなもんだ」

魚屋一家と取手の蜜柑屋一家とのいざこざは次第に陰しくなつて來る。毎日竹槍の支度をした。たすきの繩は水をふき、おもだつた子分は毎晩身支度をして寝泊りして、俄の斬り込みに備えたが、秀五郎は氣が向くと、二日も三日も家をあけて、利根を下つて、石納、佐原、時にはぶらりと成田の方へ遊びに出た。捕まつたら生命のない兇状のあることも、今日にも血の雨の降りそうな喧嘩を眼の前に行つてゐることなどは、すっかり忘れたようであつた。

また冬になった。雪が降った。利根川の房丁船で川岸つづきの親分衆の賭場を遊びまわって、松岸の遊廓まで足をのびしていた秀五郎は、十日ばかりも家をあけて、いい機嫌でおらりと木下へ帰って来た。もう日ぐれ方であった。

徳藏の家では、雨戸をはずし土間へどんどん火を焚いて、三十ばかりの子分達は、脇差のねた刃を合せ、縄だすきに白の鉢巻、草鞋をはき、四斗樽の鏡を抜いて、手に手に竹槍について殺気だっていた。

秀五郎は、これを見るとにつこりした。

「ほう大変な騒ぎだなア。御領主様が唐天竺でもお攻めなさるか」

四

徳藏はもうすっかり支度をして、草鞋のまま、奥から飛び出して来た。

「紋三郎の、いいところへ戻ってくれた。昨日から八方へ人をやってお主を探していたところだ」

「遊びそびれて申訳ありやせん。この騒ぎはこれアまたどうしたもんですえ」
相変らず笑っていた。

「どうもこうもねえ。いよいよ弥太から喧嘩状。どうも長え間、目と鼻の間で、にらみ合っていちゃおくびが出そびれているようで氣持がわるい、一つ今夜手賀沼の原で、のるかそるか、きっぱりとけりをつけようというんだ。こっちももとよりその覚悟、今夜六ツを合図に繰出すところだ」

「ハッハッハ……」

秀五郎は大きな声で腹をかかえるようにして笑った。みんなびっくりして顔を見た。

「親分、それアつまらねえ喧嘩だ」

「何？」

「にらみ合っていたっていいじゃねえか。四海一天血肉を分けた親子兄弟というではあるめえし、隣

同士で口をきかねえところもあるさ。にらみ合うのがいやだから、喧嘩をして斬るか斬られるかしてカタをつけようなんざア、大馬鹿野郎のすることだ、あッしア喧嘩アきれえだ」

「ひ、ひ、秀さん。ちと言葉がすぎようぜ」

「どうぞごんす。おまはんは何んが渡世だ。取手の弥太五郎は何が渡世だ。まさか喧嘩が渡世じゃありません。ばくち打ちが渡世でござんしょう。それとも喧嘩ですかえ」

「そ、そ、それアばくちが渡世だ」

「ばくち打ちが渡世なら、ばくち打っていれアいい、喧嘩は渡世の外だ」

「何、何んだと」

「ま、ま、あわてなさんな親分、喧嘩が渡世ならごろん棒で、あッしらアお相手ア出来ねえ。ばくち打ちがばくちを打たねえで喧嘩をしてえのなら、ごろん棒におんなせえ」

「ひ、ひ、秀！」

五

「とにかくあッしのことをお終いまできいておくんなせえ。御承知の通り、二本差を五人も斬った、斬りましたがね、これア渡世人同士の喧嘩じゃアねえ。ばくち打ちと二本差の喧嘩、彼奴らアたかが女のことから無法な喧嘩をあッしへ売って斬りつけた。これをうまくさばこうにも、武芸が表看板の侍と、ばくちが渡世のあッしではさばきようがねえんで、先方様のいう通り刀と刀にばくちを打たせて、とうとうこっちへ思う目が出た。ところで、おまはんも弥太さんは二人ともばくち打ち、何もむきになって、持ち馴れねえ脇差なんぞにものを言わせるよりア、盆の上で、きっぱりと丁と半で争って勝ったほうが思う通りにしたらいいじゃアありませんか。おまはんのほしい縄張も大抵あッしにはわかつている。弥太さんのほしい縄張もまたあッしにはわかつている。とにかく、この喧嘩、もう二た時四ツ亥の刻まであッしに任せておくんなせえよ」